

Ⅲ-1 古墳を地域資源化する —湯舟坂プロジェクトを通じて考えたこと—

諫早 直人

1. はじめに

京都府の北西端、京丹後市久美浜町須田区（以下、須田区）に湯舟坂2号墳という古墳がある。直径17.5mの小さな円墳だが、圃場整備事業に先立つ発掘調査で横穴式石室の中から最終埋葬時の状態を保ったまま、双龍環頭大刀や銅鏡、馬具、須恵器などの多彩な遺物が出土した、丹後半島を代表する後期古墳である。1981年10月31日におこなわれた現地説明会（図1）には2000～3000人も参加者がつめかけるなど、丹後半島におけるその後の発掘ブームの先駆けとなり、門脇禎二氏による「丹後王国論」の提唱にも大きな影響を与えた（門脇1983）。報告書の刊行された1983年に古墳は京都府初の府指定史跡、出土品は国の重要文化財に指定され、文化財保護法のもとで恒久的な保存措置がはかられてきた。

一方で、出土品は報告のための整理作業や保存処理のために地元を離れた後、京都府立丹後郷土資料館に寄託され、普段はなかなか目にすることが難しい。地元の人すらめったに目にする機会のない「宝物」となってしまった。もちろん現地にいけばいつでも巨大な石室をみることはできるが（図2）、実際に発掘を目にした人でもない限り、発掘当時の興奮を感じることは困難である。当時としては最高水準の調査のもとに記録され、現在も法律のもとで適切に保護されてはいるものの、時の流れとともに記憶が風化していく中、湯舟坂2号墳はこれからも地元の人に愛される、地域の誇りとなる文化遺産であり続けることができるだろうか。これは、湯舟坂2号墳だけでなく、全国各地の古墳や遺跡（埋蔵文化財）に共通する課題でもある。

京都府立大学文学部考古学研究室（以下、考古学研究室）では、2020年度京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）「丹後半島における文化遺産の地域資源化に関する総合的研究」に採択されたことを契機として、京丹後市教育委員会（以下、京丹後市）、京都府立丹後郷土資料館、



図1 湯舟坂2号墳発掘調査現地説明会の様子
(1981年10月31日)



図2 湯舟坂2号墳の現況（栗山雅夫氏撮影）

そして地元須田区と共同で、湯舟坂2号墳やその周辺にある古墳の学術的価値を再評価し、地域資源として今後活用していくための基礎資料の掘り起こし作業を進めてきた。また、調査で得られた成果については地元久美浜町での3年に及ぶ成果報告会や、京都府立丹後郷土資料館や京丹後市丹後古代の里資料館での展示など、従来型の発信に加えて、学生が主体となったグッズ作成や、地元の京丹後市立高龍小学校における連携授業など、地域資源化に向けた新たな取り組みにも着手してきたところである。2023年からは、湯舟坂2号墳の至近にある須田平野古墳において、須田区内では40年振りとなる発掘調査に着手するなど、現在進行中のプロジェクトではあるが、以下、湯舟坂プロジェクトと称して進めてきたこの5年間の取り組みの概要を紹介するとともに、古墳の地域資源化に向けた課題を浮き彫りにしてみたい。

2. 湯舟坂プロジェクトとは

湯舟坂プロジェクトは、京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）の採択を受けた考古学研究室が中心となって、京丹後市、京都府立丹後郷土資料館、須田区などと共同で、湯舟坂2号墳やその周辺にある古墳の学術的価値を再評価し、地域資源として活用することを目的として始まった。ACTRとは「地域に貢献する学術研究」を意味する Academic Contribution To Region の頭文字からとったもので、2004年度から京都府立大学の教員がもつ人文・自然・社会科学に重点をおく特色ある知識を活かし、京都府内の市町村、府内に立地する企業、NPO等から寄せられた地域課題の提案に対して共同研究をおこない、京都府内の地域振興や産業・文化の発展等に貢献することを目的とし、京都府立大学地域未来創造センター（<https://kirp.kpu.ac.jp/research/actr/>）が主管となって毎年実施されている事業である（図3）。京都府立大学文学部考古学研究室では、これまでに「丹後半島における文化遺産の地域資源化に関する総合的研究」（2020年度、研究代表：諫早直人）、「過疎化が進む地域における文化遺産の地域資源化に向けての実践的研究—京丹後市久美浜町須田区からの発信—」（2022年度、研究代表：諫早直人）、「地域・学校・博物館との連携にもとづく文化遺産の次世代に向けた活用研究」（2023年度、研究代表：菱田哲郎）、「文化遺産の記録化・記憶化による地域未来の創出に関する実践的研究」（2024年度、研究代表：諫早直人）の採択を受け、その一環で本プロジェクト

を推進してきた。本プロジェクトの活動は多岐に及んでいるが、筆者らの主たる目的は開始時から一貫している。すなわち、

① 40年前に発掘調査された湯舟坂2号墳および出土品の再調査を通じて、古墳や出土品、当時の調査を再評価する。

② 調査成果をもとにこれらの文化遺産を「地域資源」として活用し、地元の方々に「地域らしさ」を感じてもらえる仕組みを創り出す。

以上の2点である。これまでもっぱら調査・研究に注力してきた、文化遺産の最大の消費

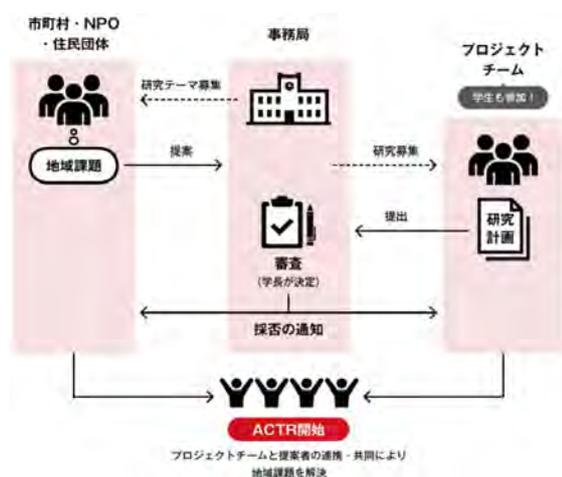


図3 京都府立大学 ACTR の枠組み

者ともいえる大学（アカデミズム）が、そこで得られた成果を最大限に活かしつつ、調査対象である文化遺産の活用や地域資源化について、文化遺産の継承者である市や地元と連携して取り組み、地域の特色ある文化遺産を地域で持続的に活用し、未来へ安定的に継承していくための仕組み（モデル）を創りだすことを目指したのである。

3. 湯舟坂プロジェクトの軌跡

(1) 湯舟坂2号墳の調査・研究

①湯舟坂2号墳出土品の再調査

1983年に刊行された湯舟坂2号墳の報告書は、発掘担当者である奥村清一郎氏の編集のもと、新納泉氏らによる考察、精緻な実測図面や高橋猪之助氏による精細な写真図版が掲載された、当時としては最高水準の報告書である（奥村編1983）。2020年9月に実施した今回の再調査では、国の重要文化財に指定されている出土品への過度なストレスや事故のリスクを避けつつ、最大限の成果を得るために、すべての出土品に対する観察をおこないつつも、三次元計測やデジタル高精細撮影など当時はなかった最新の技術を用いた調査に主たる眼目をおいた。とりわけ撮影においては湯舟坂2号墳出土品の学術的意義をビジュアルに伝える集合写真の撮影に注力した（図4）。

出土品の全面的な再調査にあたって最大のネックとなったのは、窒素封入ケースにおさめられた双龍環頭大刀であった。所蔵機関である京丹後市、保管機関である京都府と協議をおこない、事前に開封から再密封までのスケジュールを綿密に調整し、2020年9月1～16日の期間にすべての調査をおこなった。約20年ぶりとなる開封、点検・調査・撮影、再密封作業は、湯舟坂2号墳出土品の2度の保存処理に携わった（公財）元興寺文化財研究所の全面的な協力を得ることで成功した（図5）（塚本2021）。これにより（独法）奈良文化財研究所の栗山雅夫氏による、最新のデジタル撮影機材を用いた出土品の全面的な再撮影を実施することが可能となった。再撮影は高倍率写真や集合写真を中心に、湯舟坂2号墳出土品の学術的意義をわかりやすく伝えられるよう企図した（栗山2021）



図4 湯舟坂2号墳出土品集合（栗山雅夫氏撮影）



図5 環頭大刀窒素封入ケースの開封

か)。また双龍環頭大刀など一部出土品については、三次元計測、蛍光X線分析やマイクロスコープなどを用いた科学的調査や、再実測などの考古学的調査をあわせて実施した（初村・山口2022、金2022）。コロナ禍で様々な制約があったものの、これらの調査には学生も参加しており、重要文化財に直接触れ、最先端の文化財調査を目の当たりにする貴重な機会となった。

②湯舟坂2号墳石室の再調査

出土品の撮影に続いて、2020年10月には（株）相互技研や栗山雅夫氏の協力のもと、現地に保存されている古墳、石室の写真三次元計測（SfM-MVS）や再撮影を実施した（図2）。これらの作業と並行して、この地域で湯舟坂2号墳に比肩する大型横穴式石室墳として知られる須田平野古墳についても、石室の撮影と学生による写真三次元計測をおこなった（岡田2021）。湯舟坂2号墳から遠く離れた宮津市の京都府立丹後郷土資料館に保管されている出土品だけでなく、現地に保存されている石室や周辺にある須田平野古墳の基礎資料化作業もあわせて実施したことがきっかけとなって、現在にまで至る地元、須田区との協力関係が形成されていき、以下に述べる須田平野古墳の発掘調査へとつながっていった。

③須田平野古墳の調査

上述の石室撮影と写真三次元計測や、後述する古墳解説板の作成がきっかけとなって、2022年9月には須田平野古墳の測量調査を（京都府立大学文学部考古学研究室2023）、続く2023年9月には墳丘、2024年9月には墳丘・石室の発掘調査を京丹後市と大学の共同により実施した（図6）。とりわけ発掘調査は、須田区内では湯舟坂2号墳以来、40年ぶりとなるもので、内外の注目を集めた（京丹後市教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室2023・2024）。それまでの湯舟坂プロジェクトの取り組みは過去に発掘された出土品を新たに価値づけして、未来へと伝えていくことに主眼が置かれていたが、現在も継続している本発掘調査では、湯舟坂2号墳に先行する巨石墳とされながらも実態のよくわかっていない須田平野古墳の墳丘形態、規模、築造時期について、私たち自身が直接発掘し、解明することを目指している。周辺の古墳の学術調査をおこない、それらの実態を明らかにすることは、湯舟坂2号墳やその出土品のもつ学術的価値を一層高めるだけでなく、この地域の古墳を点から線、さらには面で地域資源化していくための基盤となるだろう。

（2）湯舟坂2号墳の地域資源化

①特別展、成果報告会による研究成果の発信

湯舟坂プロジェクト発足翌年の2021年度は、湯舟坂2号墳発掘調査40周年という記念す



図6 須田平野古墳の発掘調査（2023年9月）



図7 第1回成果報告会の様子（2021年7月）

べき年であったこともあり、京都府立丹後郷土資料館において企画展「黄金の大刀発掘 40年 湯舟坂2号墳細見」(2021年4月24日～6月13日)、京丹後市立丹後古代の里資料館において春季企画展示「地域の中の湯舟坂2号墳～発掘40周年記念展～」(4月24日～8月1日)がそれぞれ開催された(図8・9)。コロナ禍の開催ということもあり展示期間中に緊急事態宣言が発出され、開催期間中のほとんどが休館となってしまったが、現在、湯舟坂2号墳出土品を保管している京都府立丹後郷土資料館では重要文化財に指定されている湯舟坂2号墳の全貌を、それらが出土した状況を反映する形で展示され(森島2022)、湯舟坂2号墳の所在する京丹後市立丹後古代の里資料館では湯舟坂2号墳発掘後の40年の間に地元の行政、学校、産業界、民間それぞれが守り伝えてきた地域における活用の取り組みが紹介された(奥2022)。本プロジェクト自体は発掘調査40周年やこれらの展示を前提として始まったわけではなかったが、京都府・京丹後市と当初から連携をしていたこともあって、前年度に取得した湯舟坂2



図8 黄金の大刀発掘 40年 湯舟坂2号墳細見展チラシ(京都府立丹後郷土資料館)



図9 地域の中の湯舟坂2号墳～発掘調査40周年記念展～ポスター(京丹後市立丹後古代の里資料館)

号墳出土品の高精細写真や三次元計測データなどを迅速に広く一般にお披露目することができた。

また2021年1月23日と5月29日、二度にわたる緊急事態宣言を受けての延期を経て、7月24日には、本研究室と京丹後市、須田区の主催で京都府立大学 ACTR 成果報告会 in 久美浜「地域資源としての湯舟坂2号墳」を京丹後市役所久美浜庁舎で開催した(図7)。1981年の発掘調査担当者である奥村清一郎氏にご講演いただくなど、発掘当時の記憶・記録を掘り起こすとともに、最新の調査・撮影機器を用いた再調査成果の概要について紹介をおこなった(諫早編2021)。当日会場内では栗山氏撮影の高精細写真を用いたパネル展示や、相互技研による湯舟坂2号墳横穴式石室のVR体験などを併せて実施し、前者については写真の選定から解説シートの作成などの事前準備、会場での写真解説までを学生主体でおこなった。以来、この京丹後市役所久美浜庁舎での成果報告会は、出土品研究の最新成果(諫早・溝口編2022)、湯舟坂2号墳の被葬者像(諫早・井川編2023)とテーマを変えながら、3年連続で実施しており、門脇氏の「丹後王国論」の再検討(本庄2023)など本プロジェクトの成果をいち早く地域住民に伝える貴重な場となっている。

②学生による湯舟坂グッズの作成

再調査で得られた高精細写真や三次元計測データを活かした湯舟坂グッズ作成も2021年度より学生主体でおこなっている(図10～12)。これまでに写真パネル展示解説シート(2021年度)や須田区古墳マップ(2022年度)、高精細写真や実測図などを用いたポストカード(2021・2022年度)やクリアファイル(2022年度)、しおり(ブックマーク)(2023年度)を作成し、成果報告会会場や須田区全戸に配布してきた。あわせて2022年度には湯舟坂ポロシャツ、2023年度には湯舟坂野帳(フィールドノート)を作成し、前者は成果報告会や調査、湯舟坂2号墳の草刈りなどで大学・京丹後市・須田区の関係者が着用し、本プロジェクトを象徴するユニフォームとなっており、後者は後述する高龍小学校における連携授業の中で配布し、地域学習の副教材とした。

これらのグッズ作成は、成果報告会とともに本プロジェクトにおける古墳の地域資源化の実践の中核に位置づけられるが、立案、デザインから発注までの一連の作業を学生が主体となっておこなっている点が特色である。古墳や出土品の魅力をビジュアルに伝えるデザインはもちろん、クリアファイルでは原寸大など縮尺を意識したり、しおりに解説シートを付すなど、これらの学術的価値もあわせて伝わるものになることを意識して作成に取り組むことで、学生が古墳の地域資源化について自ら考え、表現する貴重な機会となっている(吉永2022など)。

③須田区民との交流

湯舟坂2号墳のある須田区には2020年度以来、たびたび訪問する機会があり、現在まで密な交流が続いている。2021年度からは調査だけでなく、須田区が定期的に行っている湯舟坂2号墳や湯舟坂古代の丘公園の草刈りなどの環境整備にも可能な範囲で協力をしているほか(図13)、湯舟坂2号墳発掘後の1982年から毎年10月に須田区でおこなわれている古墳慰霊祭にも2021・2022年に研究室として参加する機会を得た(図14)。また、2022年2月には須田区の依頼を受けて須田平野古墳の解説板を学生主体で作成し、須田区民と共同で古墳入口の道路に設置している(図15)。

このような地元との交流において要となっているのが2021年度の須田区区長で、デザイナ



図10 湯舟坂グッズ（2021年度作成）



図11 湯舟坂グッズ（2022年度作成）



図12 湯舟坂グッズ（2023年度作成）



図13 湯舟坂2号墳の草刈り（2022年10月）



図14 古墳慰霊祭（2022年10月16日）



図15 須田平野古墳解説板（2022年2月設置）

一の岸本卓也氏（素組アート）である。自治会は一年ごとに役職交代があり、メンバーが大幅に入れ替わる中、現在も通称、府大係として大学と地元の間のような調整をいただいている。また成果報告会のポスターや資料集表紙を毎年担当し、湯舟坂プロジェクトのロゴマーク（図16）を作成するなど、地元在住のデザイナーとしても湯舟坂2号墳の地域資源化の主翼を担っている。

④「つなプロ」、高龍小学校での連携授業

須田区は現在、約60戸で構成されるが、そのほとんどが高齢世帯である。40年前の発掘を実際に目の当たりにした方もまだご健在で、ふるさと委員会による湯舟坂古代の丘公園の整備事業など、湯舟坂2号墳をはじめとする地域の文化遺産に対する思いも強いが（新谷2021）、



図 16 湯舟坂プロジェクトロゴマーク
(岸本卓也氏作成)

実施した(図 17・18)(吉永 2023)。これらの号墳と須田平野古墳を案内する古墳ツアーを成果は小冊子にまとめられ、公共機関などで無料配布されたほか、つなプロのホームページ(<https://museumforum.pref.kyoto.lg.jp/tsunapro/1497/>)や YouTube チャンネルに動画が掲載されるなど、広く発信されている。

なお、つなプロ自体は単年度事業であったが、総合的な学習の時間の一環を利用した高龍小学校5年生の連携授業は 2023 年度以降も継続して実施している。土日などの休日ではなく、学校の授業時間を利用し、特定の学年とはいえ未来の文化遺産を担う地域のすべての子供たちに地元の古墳やその調査に触れる機会を提供するためには様々な調整が必要である。考古学研究室単独でこれを円滑に進めることは到底不可能であり、本連携授業も京丹後市と高龍小学校の全面的な協力によって初めて成り立っている。

4. おわりに—湯舟坂プロジェクトの成果と今後の展望

ここまで駆け足で湯舟坂プロジェクトの軌跡を振り返ってきた。その成果は多岐にわたり、須田平野古墳の発掘調査や高龍小学校での連携授業など、私たちが当初予想だにしなかった展開をみせている。依然道程半ば、成長中のプロジェクトであり、その評価を下すのはまだ時期尚早ではあるが、本プロジェクトがこの地域の古墳をはじめとする文化遺産の地域資源化に果たすべき役割について、筆者が感じたことを最後にいくつか記しておきたい。

一つは当然のことではあるが、「学術調査なくして文化遺産の活用なし」ということである。素材となる文化遺産は日本各地にあるが、すべてについて適切な価値づけがなされていない。特に考古学で扱う埋蔵文化財の場合、その価値のほとんどは地中に眠っている状態

未来への継承には大きな課題を抱えている。誤解を恐れずにいえば、地域の文化遺産を守っていく地域自体が存続の危機に瀕しているのである。成果を伝え、その価値を共有する地元の若者が見当たらない、これはプロジェクトが軌道に乗り、成果報告会にたくさんの人が集まる中で最初に感じたジレンマであった。

そのような中、2022 年度、京都府ミュージアムフォーラムの取り組み「次世代と地域文化をつなぐミュージアムプロジェクト(通称:つなプロ)」の「京丹後モデル」に須田区を校区に含む京丹後市立高龍小学校の5年生たちが選ばれた。つなプロは、次世代を担う子供たちがふるさとの宝物を再発見、発信することで地域文化と次世代を「つなぐ」ことを目指すプロジェクトで、本研究室も京都府や京丹後市に協力して、「総合的な学習の時間」の一環で学生が小学校への出前授業をおこなったり、湯舟坂2



図 17 つなプロ出前授業（2022年9月）



図 18 つなプロ古墳ツアー（2022年9月）

にあるとあってよい。大学、それも観光系の学部・学科でも行政系の学部・学科でもなく、文学部の歴史学科にある考古学研究室が古墳の地域資源化において果たすべき第一の役割は考古学的調査を通じた遺跡、遺構、遺物の学術的価値の可視化にあり、それこそが地域の古墳を魅力あふれる地域資源として、未来へ守り伝えていくための価値の源泉であることを強調しておきたい。

もう一つは「観光資源化は地域資源化の先にある」ということである。昨今の文化財保護法改正により、観光資源としての文化遺産の側面に改めて注目が集まっているが、私たちはその言葉をあえて避け、地域資源という言葉を使い続けてきた。その理由は、まずもって観光資源化の主たるアクターは私たち大学ではなく、京丹後市、京丹後市民であり、須田区民であるということにあるが、地域住民が地域の文化遺産の価値、魅力を知り、それを誇りと責任をもって、守り伝えていく仕組みを学・公・民一体で作りに上げていくことこそが、国史跡だけでも約 1800 件にも及ぶ日本各地の文化遺産を観光資源化していく上での大前提であると考えているからである。学術調査で得られた知見を考古学というアカデミズムの世界の中だけで消費し、調査報告書を出して終わるのではなく、地域住民にわかりやすく伝え、その語り手を一人でも増やすことこそが、地域の文化遺産の持続的な保存・活用のカギであることは、強調してもしきれない。

もちろん須田区のように過疎化が急速に進む地域においては、「文化遺産の地域資源化」というフレーズ自体が空虚に感じてしまうこともしばしばある。残念ながら歴史学や考古学という学問の世界の中には、依然として調査・研究という工程と、公開・普及や整備・活用という工程をテクニカルに切り分け、歴史学や考古学は基本的に前者だけを極めればよいという風潮も感じなくはない。ただ、その先に待っているのは人口減少や国力衰退に伴う、自らの拠って立つ学問自体の地盤沈下だろう。

日常的な学問的営みの先にある文化遺産の学術資源化と、文化遺産の地域資源化はイコールではないが、その両立は必ず成し遂げられるし、成し遂げなければならない。そして、成し遂げる責任の一端が文化遺産を糧に生きる私たち研究者、調査者にはある。これが須田区に入り、5年間、学生と一緒に試行錯誤をする中で至った現時点での筆者なりの結論である。調査に参加した学生たちの多くが須田区やそこで出会った方々に自分のふるさとのような愛着をもち、たくさんの現場経験を積んで、全国各地の文化財専門職につく（つこうとしている）姿をみると、日本の文化遺産の未来も暗くはないと錯覚してしまいそうだが、地域の担い手や持続的な予算の確保を含めて課題は山積している。引き続き現場での実践の中から、過疎化が進む地域における文化遺産の地域資源化の最適解を探していきたい。

参考文献

- 諫早直人（編）2021『京都府立大学 ACTR 成果報告会 地域資源としての湯舟坂2号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 諫早直人・溝口泰久（編）2022「地域の中の湯舟坂2号墳展開催報告」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線《発表資料集》』京都府立大学文学部考古学研究室
- 諫早直人・井川瑞希（編）2023『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅲ—湯舟坂2号墳の被葬者像を探る— 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 岡田大雄 2021「湯舟坂2号墳ともう一つの横穴式石室—須田平野古墳の三次元計測—」『京都府立大学 ACTR 成果報告会 地域資源としての湯舟坂2号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 奥勇介 2022「地域の中の湯舟坂2号墳展開催報告」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線《発表資料集》』京都府立大学文学部考古学研究室
- 奥村清一郎（編）1983『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 門脇慎二 1983「丹後王国論序説」『丹後半島学術調査報告』京都府立大学
- 金字大 2022「湯舟坂2号墳出土大刀の考古学的調査とその研究」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線《発表資料集》』京都府立大学文学部考古学研究室
- 京丹後市教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室 2023「須田平野古墳 2023年度発掘調査の成果」（須田平野古墳現地説明会 資料）
- 京丹後市教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室 2024「須田平野古墳 2024年度発掘調査の成果」（須田平野古墳現地説明会 資料）
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2023「京丹後市須田平野古墳の調査（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号
- 栗山雅夫 2021「再撮と新撮—写真で挑む湯舟坂2号墳—」『京都府立大学 ACTR 成果報告会 地域資源としての湯舟坂2号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 新谷勝行 2021「湯舟坂2号墳の発掘調査がもたらしたもの」『京都府立大学 ACTR 成果報告会 地域資源としての湯舟坂2号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 塚本敏夫 2021「開ける、調べる、閉める—黄金の大刀を遺し・伝える保存科学—」『京都府立大学 ACTR 成果報告会 地域資源としての湯舟坂2号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 初村武寛・山口繁生 2022「湯舟坂2号墳出土大刀・銅鏡の文化財科学調査」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線《発表資料集》』京都府立大学文学部考古学研究室
- 本庄総子 2023「丹後王国論の現在」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅲ—湯舟坂2号墳の被葬者像を探る— 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 森島康雄 2022「細見、そして再検討—湯舟坂2号墳細見展から—」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線《発表資料集》』京都府立大学文学部考古学研究室
- 吉永健人 2022「湯舟坂2号墳を「作る」「伝える」—京都府立大学の文化遺産活用—」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線《発表資料集》』京都府立大学文学部考古学研究室
- 吉永健人 2023「湯舟坂プロジェクトとつなプロ—世代を超えた文化遺産活用—」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅲ—湯舟坂2号墳の被葬者像を探る— 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2